

寺とも落語会



去る10月1日(日)午後1時半～徳成寺において、毎年恒例の寺とも落語会が開かれました。左の演者の皆さんが今回も盛り上げて下さいました。「芸は身を助く」と言いますが、一芸をもってらっしゃる方のお顔の表情は面白いですね。見ているだけで、笑みがこぼれます。そんな演者と笑いを共有しようと県内各所から参加者の方々がお集まり下さいました。演者によると、この日の参加者の皆さんもよく笑って下さって演じやすかったそうです。

先頭は、どんぐり亭ぼりすさんの「ぐっどじょぶ」です。桂文三さんの持ちネタだそうです。散々な目に会った主人公が、福の神と死神を同時に呼び出し、福の神により一発逆転を成し遂げたまでは良かったのですが、有頂天になり過ぎ、うっかり「もういつ死んでもいい」と口走ってしまったがために死神が現れる断でした。それにあやかり上の写真で、演者の皆さんは全員でグッジョブのポーズをしています。



次は、今回初登場の想呂家笑志（おもろやしろうじ）さんです。高校生の頃から落語研究会で落語に親しんだそうです。「もう今回、徳成寺の高座で落語を演じることができ何も思い残すことはない」とまくらで笑いを誘いました。弘法大師をテーマにした「大師の杵」を演じられました。弘法大師のエピソードとして、道で倒れている薦を身にまとった人に、まんじゅうを差し出し「くうかい!？」とのたまったと言って一堂大爆笑でした。



俗曲のより加さん、御三味線と小唄・都々逸などを披露して下さいました。結婚50周年のお祝いの曲やお祝いにふさわしい都々逸「かわす言葉は少ないけれど、『お〜い』『は〜い』で50年」と謡っておられました。つつっけんどんな返事をする、それだけで夫婦仲も険悪になるので気を付けたいとも仰ってました。その通りですね。



最後は、酔亭藪太郎さんの「ねずみ」でした。まくらのお日さまとお月さまと雷さんの三人で旅に出て、宿屋に泊まる小噺と雷さんの二段重ねの弁当箱の小噺は秀逸でした。よく出来た小噺は、作者不詳ですが語り継がれて多くの人々をクスリと笑わしてきたでした。落語の「ねずみ」は、江戸時代の名工・左甚五郎にまつわる落語です。高松市中心部にあった左甚五郎のお墓は現在、四国村に移転したのだとか。名人が彫ったねずみが大活躍です。